

本調査の特徴

本調査は、日本の合計特殊出生率が1.29（平成16年）まで低下し、少子化に対する社会の関心が高まっているなかで、乳幼児を持つ父親の子育てに関する意識と実態や仕事と家庭のバランスなどをとらえることを目的に実施している。ベネッセ次世代育成研究所では、今後経年での比較ができるよう配慮して今回の調査を設計している。

本調査の特徴は、以下のようにまとめられる。

1. 乳幼児を持つ父親の家庭生活の実態や子どもや家庭に対する意識と実態について幅広くとらえることができる

0歳から6歳就学前の乳幼児を持つ父親を対象に、子どもとの関係、家事・育児の実態、父親の子育て観、仕事と家庭のバランスなど、父親の子育てにかかわる意識と実態について広範囲に聞いている。

2. 乳幼児の年齢による父親の意識と実態の違いを把握することができる

今回の調査は0歳から6歳就学前の乳幼児を持つ父親を対象としており、父親の子育て意識や実態が、乳幼児の年齢によってどのような違いがあるのかをとらえることができる。

3. 経年比較に配慮した設計にしている

調査設計にあたっては、経年比較が可能なように、父親の子育て意識・実態や仕事と家庭のバランスを考えるうえで基本的な項目を選択して、調査内容を構成した。

調査概要

1. 調査テーマ 父親と子どもとの関係、家族関係、父親の仕事と家庭のバランスなど
2. 調査方法 インターネット調査
3. 調査時期 2005年 8月
4. 調査対象 0～6歳就学前の乳幼児を持つ父親 2,958人（有効回答数）
5. 調査地域 首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）
6. サンプル数 2,958人（有効回答数）
 - * 年齢別構成
 - 0歳児 430人、1歳児 467人、2歳児 468人、3歳児 473人、4歳児 488人、5歳児 480人、6歳児 152人
 - * 6歳児は、就学前のみを対象としているため、6歳0～4か月である。
7. 調査項目 子どもとかわる時間（平日・休日）／子どもとの絆／家事・育児の実態と希望／配偶者の就業状況／女性の就業についての意識／配偶者との絆／夫婦の家事・育児スタイル／子育てストレス／子育てで力を入れたいこと／子育ての将来への不安／理想的な父親イメージ／育児休業制度の活用実態と意向／職場と家庭の考え方／子どもを持つことを後輩にすすめるか／もう一人子どもを持ちたいか／子どもの将来への期待／進学期待／家族の中の存在感／精神的な絆を結ぶ相手

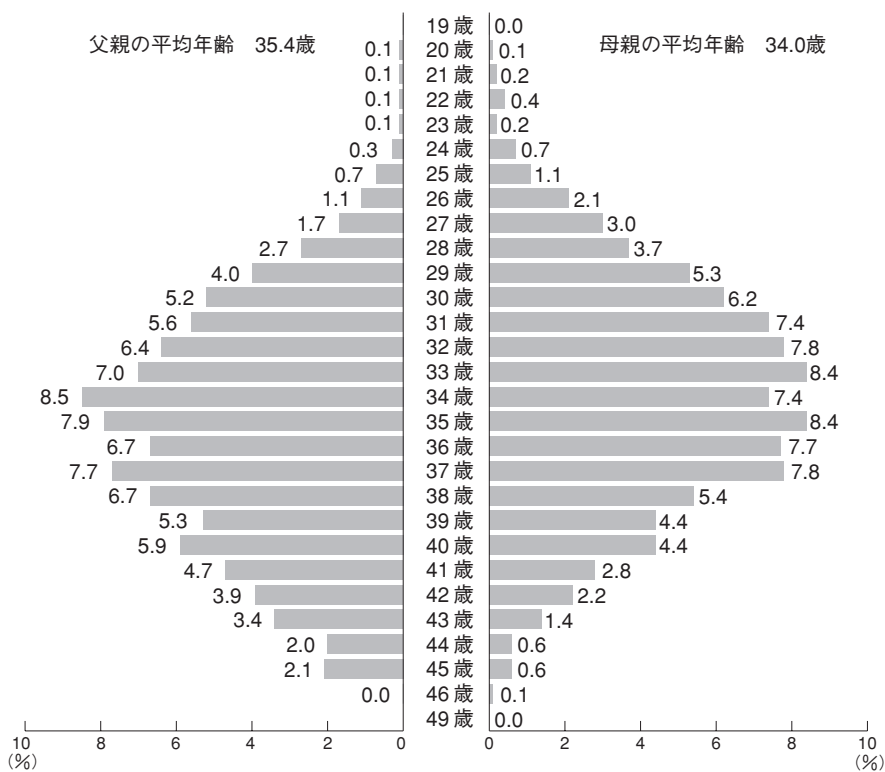
基本属性

ここで説明する基本属性は、今回の調査の対象である0～6歳就学前の乳幼児を持つ父親2,958人を母体とした数値である。

また、「乳幼児の父親についての調査」速報版では、総計が100%となるように数値を一部加工しているため、速報版と本報告書の数値に異なる部分がある。

A 父親の属性

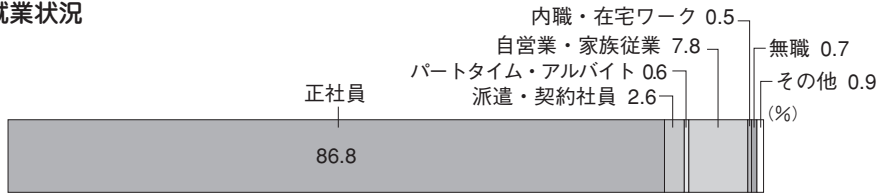
■ 年齢



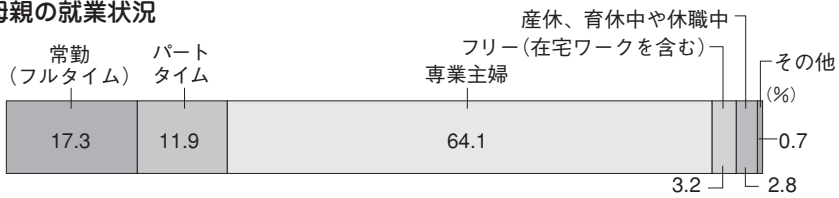
注1) 母親は、非該当1件除く(サンプル数 2957人)。

注2) 19歳(母親)、46歳(父親)、49歳(母親)については、該当者が1名ずつのため、0.0%となっている。

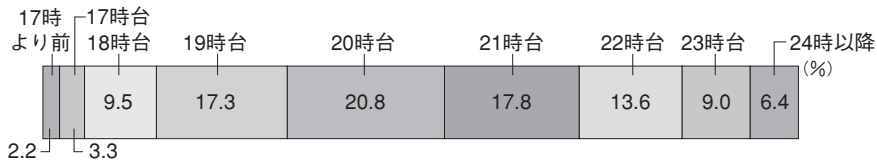
■ 就業状況



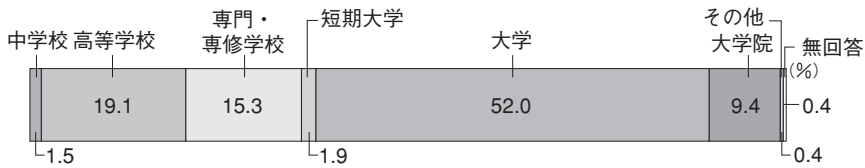
■ 母親の就業状況



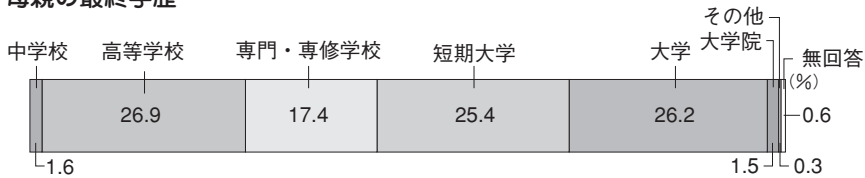
■ 帰宅時刻



■ 最終学歴



■ 母親の最終学歴



B 子どもの属性

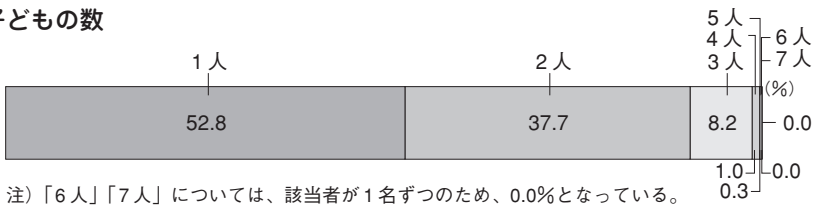
■ 対象となる子どもの性別



■ 対象となる子どもの年齢



■ 子どもの数



■ 対象となる子どもの出生順位

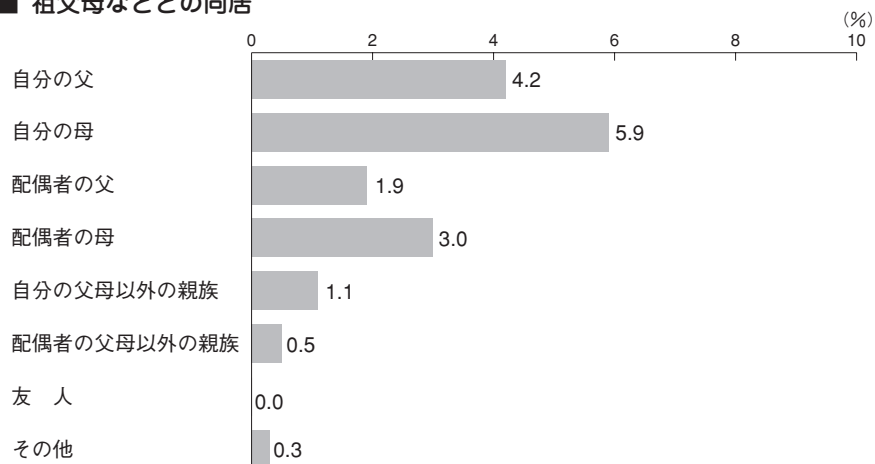


■ 対象となる子どもの就園状況



C その他

■ 祖父母などとの同居



注) 複数回答。

■ 居住地



本報告書の要約

第1章 家族とのかかわり

第1節 子どもと過ごす時間、子どもとの関係

平日に子どもと過ごす時間の理想は、7割以上の父親が「2時間以上」と答えるが、実際に過ごす時間は「2時間未満」が6割以上を占める。一方、休日は半数あまりが10時間以上子どもと過ごしており、理想とほぼ一致している。また、子どもとの関係は良好ととらえる父親が多い。

第2節 家事・育児の実態と理想

父親は家事よりも育児に参加する比率が高い。妻子以外の同居親族がいるほうが父親の家事参加は少なく、育児参加は多い傾向がみられる。家事・育児に積極的に参加する父親ほど、家事や育児に「もっとかかわりたい」と考え、夫婦の絆が強い。

第2章 父親の子育て観・教育観・家族観

第1節 父親役割と子育て意識

0～6歳の子どもを持つ父親の約半数が、子どもの出産に立ち会った経験を持つ。全体的に子育てを肯定的にとらえる父親が多いが、実際には、「子どもとの時間を十分にとれない」と思う父親が多い。父親として今後不安なことは、経済的な問題が大きい。

第2節 父親の子育て観、将来への期待

子育てで、文字・数の学習より人とかかわりや興味関心を伸ばすことに力を入れたいと思っている。子どもに将来「友人を大切にする人」「自分の家族を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」になってほしい比率が高い。一方、「仕事で能力を発揮する人」などの比率が低いことから、子どもの将来に対して、社会的成功より人とのよい人間関係づくりを重視している父親の姿がうかがえる。また子どもへの学歴期待では、大学卒業以上の学歴を望む父親が8割弱いることがわかる。

第3節 家族に対する父親としてのスタンス

性別役割分業を肯定する意識が強いという父親は約3割、男らしく・女らしくといった意識が強いという父親は約半数にのぼる。「自分は我が家で人気者だと思う」を6割が肯定するなど、父親としての存在感を保っていると感じている者が多いが、疎外感を持つ者も1割前後存在している。

第3章 父親の仕事と家庭のバランス

第1節 夫の側からみた、妻の就業に対する考え方

約6割の夫は、子どもが生まれたら妻が仕事を一時やめることを望んでいる。妻の年収が高いほど、「妻が仕事を持つことへの賛成度」の比率は高くなる傾向にある。性別役割分業意識の薄い夫は妻の仕事への賛成度が高いが、出産後の仕事の継続には必ずしも賛成ではない。

第2節 育児休業制度の取得実態と子育て支援策に望むもの

平成15年に「次世代育成支援対策推進法」が成立し、子育て支援に取り組み始めた企業や自治体も増えてきている。本調査では、父親の育児休業の取得経験率は2.4%だったが、他に23.0%は「使いたいけれど使えなかった」と回答している。非取得理由には、職場に迷惑をかけることや、多忙が多く挙げられた。父親が使いやすい子育て支援策としては、フレックスタイムなど柔軟な勤務形態の整備や、男性の育児休業の取得義務化などの法的制度の充実を求める声が多かった。

第3節 現在の生活満足度・子育て満足度

現在の子どもの成長ぶりへの満足度は高いが、自分自身の子育てには約4割が「満足していない」と回答している。また8割以上の父親が「子どもを持つことを後輩にすすめ」、約半数が「もう一人子どもを持ちたい」と思う。